様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　5 月　10 日現在

機関番号：15401
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010　～　2012
課題番号：22520794
研究課題名（和文）　外国人旅行者の増加に伴う日本国内観光地の再構築-観光のイノベーション能力の検討
研究課題名（英文）　The reconstruction of Japanese domestic tourist destinations in combination with the increase in foreign tourists: considerations on the innovative potential of tourism
研究代表者
フンク・カロリン　（FUNCK CAROLIN）
広島大学・総合科学研究科・准教授
研究者番号：70271400

研究成果の概要（和文）：
この研究の結果、外国人観光者と日本人観光者の動機や行動が異なっていることを確認し、外国人観光者の増加は観光産業や観光地にイノベーションを起こす可能性を持っていることを明らかにした。一方、需要の地域的偏りもあり、このようなイノベーションは一部の地域や企業に限定され、そこで「インバウンド・クラスター」が形成されるといえよう。

研究成果の概要（英文）：
This research has shown that foreign and Japanese tourists have different motives and patterns of behavior and therefore the potential to induce innovations in tourist destinations and industries. However, due to the regional unbalanced distribution of foreign tourists, these innovations are restricted to some areas and enterprises, which could be called “inbound clusters”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学
キーワード：観光地理学、インバウンド、イノベーション、日本

１．研究開始当初の背景

国際観光は経済危機や流行病の影響を除けば著しく発展している。このような成長の背景に、観光地や観光産業における数多くのイノベーションがある。日本の場合、訪日外国人旅行者数は 1964 年以降増加傾向にあるが、それに関連する観光研究は旅行者行動分析、目的地選択分析を行い、または誘致成功事例の紹介する内容の文献が多い。つまり、観光地をイノベーションの場として把握し、イノベーションの要因、アクター、過程を分析する研究は英語圏でこれから増加する見通しであるが、日本ではほとんどみられない。また、2010 年は日本政府が進めているビジット・ジャパン・キャンペーン（以下 VJC）の目標年次となり、その政策の数値的な目標達成ではなく、観光地への影響を評価するには適切な時点であるといえよう。そこで外国人

旅行者や、外国観光産業を受け入れることにより観光地で発進するイノベーション過程を明らかにし、ローカル・スケールに進む変化と、ナショナル・スケールで実施される日本政府のインバウンド推進政策と、グローバル・スケールで起こる国際観光市場の変更を関連付けるため、本研究に着想した。

２．研究の目的

日本国内観光地の多くが 1960 年代から発展したため、現在、観光地の再構築が重要な課題となり、行政や民間企業、観光地住民によるイノベーションが問われる。一方、日本政府は観光立国計画やビジット・ジャパン・キャンペーンでインバウンド観光を推進し、外国人旅行者が確実に増え、国内観光を多様化させている。観光地は言語環境の整備、新たな宿泊施設の提供、通訳ガイドの育成など、様々なイノベーションに取り組み、外国人旅行者を受け入れている。そこで本研究は外国人旅行者の増加が日本の観光地に起こした変更を分析し、イノベーションのメカニズムを明らかにし、停滞または衰退からの脱出を可能とする要因を見つけ出すことを目的とする。

３．研究の方法

（１）観光需要の多様化を確認するために、日本人・外国人旅行者の観光動機、観光行動に関するアンケートを日本語、英語、韓国語、中国語で実施した。飛騨高山 410 人、別府 246 人、宮島 370 人から回答を得た。

（２）個別イノベーションの分析と整理のために、イノベーションに関連する先行研究に基づく分類を行った。観光地におけるイノベーションの様々なアクター（観光産業、観光地行政など）の聞き取り調査を行政、観光協会、宿泊施設を中心に実施した。また、観光産業のアンケート調査を行い、飛騨高山 100 件、別府 48 件、宮島 60 件から回答を得た。

（３）イノベーションのネットワーク化を分析：行政資料、新聞記事などからイノベーション波及課程を確認した。

（４）日本政府のインバウンド観光政策の成果を分析するために、専門家グループなどが持つ直観的意見を収束するデルファイ法を活用する予定であったが、経済危機や、東日本大震災と福島原発事故によりインバウンド観光が不安定になり、評価することが難しい時期であったため、この部分を断念した。

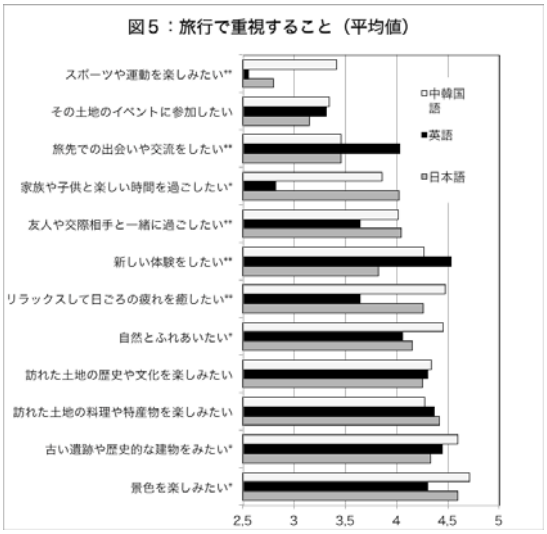
（５）調査場所：飛騨高山（岐阜県）、別府（大分県）、宮島（広島県）、一部奈良（奈良県）

４．研究成果

（１）統計資料の分析から、インバウンド観光が非常に不安定な現象であり、その上に空間的に偏り、一部の地域や場所に集中していることを確認した。

（２）観光者を対象にしたアンケート調査から、日本人と外国人、または各地域からの外国人の間に観光動機、観光の好みや実際の行動が異なっていることを確かめ、その差は男女、年齢などによる差より有意であった。

以下のグラフは高山で実施した調査結果の一部であるが、アンケート調査では、「旅行で重視すること」を訪ねた。



注：* 0.05 で、　** 0,01 で有意差がある項目（分散分析、Kruskall-Wallis 検定）（無回答を除く）

このグラフで表している調査票言語別の結果を見ると、以下のようになる：

「英語」の平均値が高い項目：「旅行先の出会いや交流したい」

「中国韓国語」の平均値が高い項目：「スポーツや運動を楽しみたい」、「自然とふれあいたい」、「古い遺跡や歴史的な建物をみたい」

「英語」と「中国韓国語」の平均値がともに高い項目：「新しい体験をしたい」

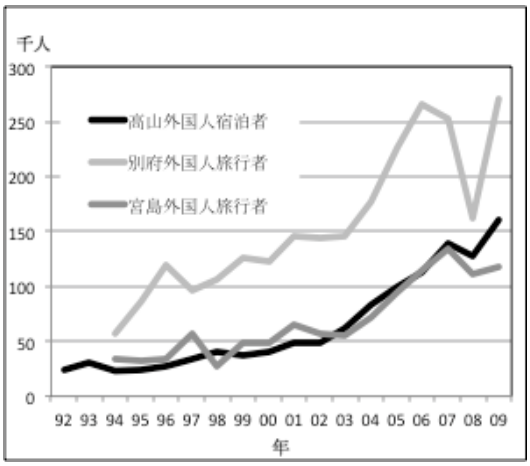
「日本語」と「中国韓国語」の平均値がともに高い項目：「家族や子供と楽しい時間を過ごしたい」、「友人や交際相手と一緒に過ごしたい」、「リラックスして日ごろの疲れを癒したい」、「景色を楽しみたい」

まとめると、英語の回答者は出会いや体験を重視し、中国韓国の回答者は自然や歴史的建物という観光資源を重視する。また、日本語と中国韓国語の回答者はともに旅行でリラックスして、日ごろあまり一緒に時間を過ごせない家族や相手との交流を大切に思っている。

他の調査地域や調査項目においても、このような差が見られた。

（３）調査対象地域について、インバウンド観光の成長パターンが異なっている。

以下のグラフは調査地域の外国人旅行者数の推移を表している。別府は韓国からの旅行者が大部分を占めているが、2008 年のリーマンショックから始まる経済危機の影響を強く受けている。高山の場合、外国人宿泊者は全体宿泊者の 13.6%(2010 年)を占め、宿泊産業の安定に貢献している。宮島では、1997 年から 2010 年まで 3.3 倍に増加し、全国平均を上回っている。



このような異なった推移にもとづいて、各観光地の再構築におけるインバウンド観光の機能も異なっている。

・高山：欧米の個人外国人旅行者とアジアからの団体は交通網の発展に左右される国内市場を安定させる。

・宮島：外国人旅行者は小規模宿泊施設の重要なニッチ市場となる；個人旅行者の市場を多様化させている。

・別府：衰退する温泉地と大規模宿泊施設の活性化につながる；国際大学との強い関係

（４）観光産業におけるイノベーションについて、観光に零細企業が多いことがイノベーションの障害と見なされている。しかし、調査の結果、官民の協力、民間のサービス事業、国際的な教育施設による支援などがイノベーションを可能にすることが明らかになった。また、インバウンド観光は小規模施設のニッチ市場となりえる例も多く発見した。

日本におけるインバウンド観光は国内市場を多様化させ、イノベーションにつながる可能性を有しているといえる。しかし、このような変化は一部の観光地、またはその中で観光産業の一部に限られて起こると思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① Funck, Carolin, Tourismus in Japan: Destinationen im Wandel, Geographische Rundschau, 査読有, 65-3, 2013, 44-49

②フンク・カロリン、宮島における外国人と日本人観光者の行動、厳島研究、査読無、第 9 号、2013、(1)-(12)

③Funck, Carolin, The innovative potential of inbound tourism in Japan for destination development - a case study of Hida Takayama. Contemporary Japan, 査読有, 24-2, 2012, 121-147

〔学会発表〕（計 4 件）

①フンク・カロリン/クーパー・マルコム、日本国際観光地における外国人力者の特徴と受け入れ、第 27 回日本観光研究学会全国大会、2012 年 12 月 2 日、仙台市

②Funck, Carolin/ Cooper, Malcolm, The Innovative Potential of Inbound Tourism in Japan, International Geographical Union Pre-Conference Symposium, 2012 年 8 月 25 日, Trier (ドイツ)

③ Cooper, Malcolm, Examples of Where Branding for the Tourism Industry can go Wrong, Keynote Speech National Seminar on Tourism Branding Strategies, 2012 年 12 月 8 日, Teheran （イラン）

④Cooper, Malcolm, An Evaluation of the One Village One Product Movement in Asia, 2012 International Conference on Tourism, Hospitality, Leisure & Recreation Management (Keynote Speech), 2012 年 5 月 11 日, 台北(台湾)

〔図書〕（計 2 件）

①Funck, Carolin/ Cooper, Malcolm, The Innovative Potential of Inbound Tourism in Japan. In: Kagermeier, Andreas/ Saarinen, Jarkko: Transforming and Managing Destinations. Studien zur Freizeit- und Tourismusforschung, Verlag MetaGIS-Systems, 2012, 289-297

②Cooper, Malcolm, Landscape as Theme Park: Demographic Change, Tourism, Urbanization and the Fate of Communities in 21ST Century Japan. In: W. C Gartner and C. H. C. Hsu (Eds) The Routledge Handbook of Tourism Research, Routledge, 2012, 392-405

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

フンク　カロリン（FUNCK CAROLIN）
広島大学・総合科学研究科・准教授
研究者番号：70271400

(2)研究分担者

淡野　昭彦　（TANNO AKIHIKO）
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：30127419

クーパー　マルコム（COOPER MALCOLM）
立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授
研究者番号：50369146

(3)連携研究者